

秦葵文瓦当考

飯 島 武 次

一 は じ め に

戦国時代から統一時代の秦国領域で用いられた瓦当に葵文瓦当と呼ばれる一群の円瓦当が存在する。この種の瓦当は、円形瓦当面に主文として圏線から外側、内側に展開する蕨形文を配置するもので、解放前にはあまり注意されていなかったが、近年になって、秦を代表する瓦当の一つとして注目されている。本小論では、葵文瓦当の秦瓦当中に占める編年的位置づけと、葵文瓦当自体の編年、さらに葵文瓦当のもつ性格について検討を加えてみたいと思う。

わが国における戦国、秦漢瓦当の紹介や研究論文は、関野貞博士による『建築雑誌』第384号の「西遊雑信、第一」の中に記載された「支那に於ける最古の瓦当¹⁾」あたりが比較的古い例である。関野貞博士は、「支那の瓦及び磚²⁾」の中で、秦漢瓦当として葵文瓦当の写真を紹介され、「蕨手が風車様に内圏に接着して作らるることもあり」と述べていられるが、葵文瓦当の紹介としては、古い資料例と思われる。この葵文瓦当の拓本と思われる資料は、『考古学講座』第五巻の関野貞博士「瓦」のなかにも見られる³⁾。春秋戦国時代の半瓦当や、秦漢時代の獸文瓦当、雲文瓦当、文字瓦当については、先記した関野貞博士の諸研究以外にも、梅原末治博士の「東亜の古瓦に就いて⁴⁾」、あるいは駒井和愛博士の「漢蕨手文瓦瑤考⁵⁾」、「漢華文瓦瑤考⁶⁾」、「河北省易県発見の雙龍文瓦瑤に就いて⁷⁾」など数多くの論述が存在する。中国においては、中国人の文字を尚ぶ気風とも相まって、秦漢の文字瓦当に関する著録が比較的早くから刊行され、程敦の『秦漢瓦當文字⁸⁾』、朱楓の『秦漢瓦當図記⁹⁾』、羅振玉『秦漢瓦當文字¹⁰⁾』などの図録集が著名となっている。

1950年代以降の瓦当研究としては、関野雄博士による『半瓦當の研究¹¹⁾』が最も代表的な業績である。ここでの関野雄博士の研究は、春秋戦国時代燕・斉の半瓦当を中心に魯・薛・趙の半瓦当、および漢代の半瓦当についても論述されている。関野雄博士の研究課題が半瓦当であり、また、1950年代以前の戦国時代に属す瓦当資料の多くが、燕・斉・魯国の遺跡からの出土遺物が中心で、戦国時代の秦や統一時代の秦に属すと考えられる瓦当について論述することが不可能であったためと思われる。その後1950年代を経て1960年代に入ると、秦国領域内からの半瓦当や円瓦当の出土資料が報告されるようになる。1950年代以降の新資料を用いて、三上次男博士は、「戦国瓦當と秦瓦當——瓦當文様を通じて見た戦国文化と秦帝国文化との関係——」を發表された¹²⁾。三上博士は発

掘報告から新出土の各種戦国瓦当を提示し、瓦当文のもつ思想的意義について検討されている。そのなかで、特に秦の葵文瓦当、雲文瓦当を取上げ、それぞれの瓦当について、「瓦當にひとしく附けられている葵文は、戦国時代の秦瓦の代表的文様としなければならない」また「瓦當の雲文（蕨手文）が統一時代の秦瓦の文様を代表することは動かすことのできない事実となる」と論述されている。

秦瓦当の出土の増加とともに、近年になって、中国では秦瓦当に関する研究論文や瓦当の調査報告が相継いで発表されている。陳直は、著録に見られる瓦当拓本を中心に、秦漢の宮殿名、冢名、吉祥語句、画文、雲文に検討を加え、秦漢瓦当の年代、出土地、書体などの研究を「秦漢瓦当概述」として、1963年に発表している¹³⁾。この論文は、秦漢瓦当の総括的研究として、今に至るまで重要な意味を持つ論文となっている。秦始皇陵の諸調査の進展に伴ない、秦始皇陵々園内の諸建築に用いられていたと考えられる瓦当の姿がしだいに明らかになってきている。秦始皇陵々園内出土の瓦は、始皇帝即位の年の前247年以降、秦の滅びる前206年までの瓦の標準となる遺物と考えられるが¹⁴⁾、陝西省臨潼県文化館は、「秦始皇陵新出土的瓦当」と題して、始皇陵内城の西城壁外建築址出土の瓦当拓本を発表している¹⁵⁾。これらの瓦当は、先記した前247年から前206年の間に属す遺物の可能性が高いが、従来、漢代の瓦当とされていた乳釘（中房凸瘤）のある雲文瓦当を秦代の遺物とし、乳釘（中房凸瘤）の存在で秦、漢の区別はつかないと論述している。馬建熙氏は、「秦都咸陽瓦当」のなかで、陝西省咸陽遺跡から出土した瓦当を簡単にまとめている¹⁶⁾。ここで、馬建熙は植物文瓦当のなかの葵文瓦当を、第一種（輻射状葵花形）、第二種（六個巻曲文様形）、第三種（四個尖葉四個巻雲文形）、第四種（変形葵文・八個巻雲文形）に分類しているが、それぞれの葵文瓦当が持つ意味については、触れていない。また、秦の雲文瓦当は秦代に流行した「五徳相勝」思想と不可分の関係にあるとし、雲文は『史記』封禪書に見られる「秦得水徳」の観念を反映したものと述べ、雲竜との関係を示唆している。馬建熙氏のこの考えは、駒井和愛博士が雲文をして「瓦瑄に見ゆる蕨手文もまた雲を表徴したものであらうと思われる¹⁷⁾」と論述されている説と相通じる考えである。張旭氏は、1982年に、鳳翔雍城遺跡、臨潼櫟陽遺跡、咸陽遺跡、阿房宮遺跡、秦始皇陵など秦の諸遺跡から出土する瓦当に関するまとめを「秦瓦当芸術」と題して発表している¹⁸⁾。彼は、秦の瓦当の図案を、戦国初期、戦國中晩期、秦統一後に分けて説明を加えている。戦国初期には、鹿、獾、羊、鳥、犬などの鳥獣文が主で、戦國中晩期には少数の魚、亀、蟬、蝴蝶などの文様、植物文様の菊花文、葵文、変形植物文、さらに動物と植物の結合した文様などが出現し、また雲文を主題とした雲文瓦当が多量に見られるようになるという。秦統一後になると、戦国晩期の題材が継承され、葵文瓦当のほか、各種の雲文を主題とした瓦当が主要なものとなり、夔文瓦当や文字瓦当も出現してくると論述している。張旭氏のこの論文は、秦の半瓦当についてまったく触れていないが、秦の円瓦当に関して、戦国初期、あるいは戦國中晩期、秦統一後などの年代観を与えた点を評価してよいであろう。しかし、戦国初期と言っても、戦国時代の開始を前476年とするか、前453年または前403年とするかによって考古学的な年代観がかなり変わってくる。張旭氏の論文で

秦葵文瓦当考

は、戦国初期が、前5世紀中葉以降を示すのか、前4世紀以降を示すのか、いま一つ不明確である。

筆者は、1982年に「秦都雍城瓦当考」のなかで、陝西省鳳翔県雍城出土の縄文や饗餮文を施した半瓦当、鳥獣文や葵文を施した円瓦当について紹介し、その年代に若干の考証を加えた¹⁹⁾。張旭氏が戦国初期とした鳥獣文瓦当のうち、鹿文瓦当に関しては、前4世紀から前3世紀前半、また場合によっては前5世紀後半も含まれることを示唆した。虎文瓦当・双獣文瓦当・夔鳳文瓦当に関しては、それらを前4世紀を中心とした遺物と考え、四獣文瓦当については、若干時代の下る前4世紀後半から前3世紀前半の年代を与えてみた。本論で問題とする葵文瓦当についても触れたが、雍城から出土する単線の葵文（蕨手）をもつ葵文瓦当を咸陽遷都後の前4世紀末から前3世紀中葉の遺物と考えた。

以上述べてきた先学の秦瓦当に対する諸研究および筆者の過去の秦瓦当研究を踏えて、葵文瓦当の性格と年代について論述してみたい。

二 秦 の 瓦 当

秦の造瓦技術は、西周の造瓦技術の伝統を受継いだもので、前714年の秦寧公が平陽城（陝西省岐山県西南附近）に都を遷したころには²⁰⁾、すでに宮殿建築に半瓦当の類が用いられていたであろうことが想定されるが、まだそのような遺物は知られていない。遺物の上で秦瓦当が明確になるのは、雍城（陝西省鳳翔県城の南側）に遷都してからのものである。雍城時代（前677年から前383年）の瓦当としては、まず、縄文半瓦当が知られる。縄文半瓦当は今日知られる秦瓦当としては、最も古手の類で、直径10cmないし15cmほどの半瓦当の瓦当面に、半円形の寛帯部分に縄文を施したものが一般的である。縄文半瓦当は、前7世紀後半から前6世紀に属す遺物と推定される。縄文半瓦当に引継いで、秦国においても饗餮文半瓦当が出現している。秦の饗餮文半瓦当は前5世紀以降、前4世紀初頭までの遺物と考えられる。秦で円瓦当の利用が開始されたのは、一般的には前4世紀に入ってからのことと思われるが、場合によっては、鹿文円瓦当など少数の円瓦当が前5世紀後半に出現していた可能性も考えられる。雍城からは、鹿文瓦当・虎文瓦当・双獣文瓦当・四獣文瓦当・夔鳳文瓦当・葵文瓦当・輻射文瓦当・葉文瓦当・雲文瓦当などの円瓦当が発見されている。そのなかで、鹿文瓦当については、前5世紀後半から前4世紀初頭、あるいは、前4世紀から前3世紀前半の年代が相定される。虎文瓦当・双獣文瓦当・夔鳳文瓦当については前4世紀を中心とした年代が、四獣文瓦当については前4世紀後半・前3世紀前半の年代が考えられる。これらの鳥獣文瓦当は、主として、秦の都が雍城から櫟陽城に遷ってから後に雍城に造営された宮殿に用いられた瓦当である可能性が強いと考えてよいであろう。もし、これらの鳥獣文瓦当を、雍城が秦国の首都であった時代の遺物と想定すると、すべての鳥獣文円瓦当を前5世紀以前のものとする必要があり、この前5世紀以前の年代は若干古すぎるように思われる。鳥獣文瓦当と同時か、やや遅れて出現したと考えられる瓦当図案が葵文の類である。葵文瓦当は、秦の都が櫟陽に遷った前4世紀以降に出現したものと考えられ、雍城址、推定櫟陽城址、咸陽城址などから発見されている。咸陽の

各宮殿址や秦始皇陵からは、大量の雲文瓦当が発掘されている。雲文瓦当は、咸陽城が造営された前4世紀中葉以降のある時期から製作が開始され、秦始皇帝が即位した前3世紀中葉には相当量盛行していたと推定される。雲文瓦当は、統一時代の秦の関中地域で好んで使用され、漢の勃興と共に雲文瓦当の使用地域が中国全土におよんだものと考えられる。

三 葵文瓦当を出土する遺跡

葵文瓦当の類は、すべて陝西省内に存在する戦国の秦国に関連する遺跡から出土している。葵文瓦当が注目された当初、陝西省臨潼県武家屯付近の推定櫟陽城から出土した葵文瓦当に対して、秦咸陽城、阿房宮、秦始皇陵、漢長安城、漢諸帝陵からは出土したことの無い新種の瓦当であるとの見解が出された²¹⁾。しかし、1966年以前の『考古』1963年第8期には、1962年に行なった陝西省鳳翔県秦雍城の報告が発表され、そこには葵文瓦当の写真がすでに掲載されている²²⁾。その後、陝西省咸陽市秦咸陽城、西安市阿房宮からの出土も知られ、知られている限り葵文瓦当を出土する遺跡には、雍城、推定櫟陽城、咸陽城、咸陽城郊外阿房宮址が存在する。

秦雍城 陝西省鳳翔県城南側一帯に存在したと考えられる雍城に関しては、いくつかの古典文献史料と、発掘報告がある。『史記』秦本紀には、

徳公元年、初居雍城大鄭宮。以犧二百牢、祠鄜時。卜居雍、後子孫飲馬於河。

と見られ、『正義』には、

卜居雍之後、国益廣大、後代子孫得東飲馬於龍門之河。

とあって、徳公の元(前677)年に初めて雍城の大鄭宮に居住し、三百牢の犠牲を用いて鄜時で祭祠を行ない、雍に都することを卜したところ、占辞には、「雍に都した後、子孫は強大になり、東方に広がり、龍門河で馬に水を飲ませるようになる」と答えが出たという。雍城は、その後、獻公二(前383)年に、陝西省臨潼県武家屯附近の「櫟陽城」に遷都するまで、秦の都であったとする説が一般的である。雍城については、『漢書』地理志に、

雍(秦恵公都之……橐泉孝公起、祈年宮恵公起、棧陽宮昭王起)

が見られるが、雍城が咸陽城時代にも秦の古都として重要な位置を占っていたことは、『史記』秦始皇本紀に記載されている秦始皇帝九(前238)年の事件によっても知ることができる。『史記』秦始皇本紀に、

九年、四月、上(王)宿雍、……長信侯毒作亂而覺。矯王御璽、及太后璽、以發縣卒及衛卒・官騎・戎翟君公舍人、將欲攻斬年宮為亂。

橐泉宮、斬年宮については『三輔黃圖』に、

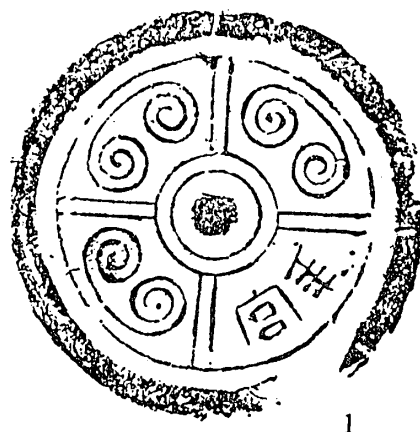
橐泉宮皇覽曰、秦穆公冢在橐泉宮・祈年觀下……斬年宮、穆公所造、廟記曰、斬年宮在城外。

秦始皇本紀斬年宮在雍。

と見られる。陝西省鳳翔県城附近は、従来からも秦雍城の存在した位置と考えられていたが、1962年に鳳翔県南古城村の東側で「年宮」「棧」字の円瓦当が発見されるにおよんで²³⁾、(これらは漢

秦葵文瓦当考

瓦当ではあるが) それらの文字が、秦雍城に建てられていたとされる蕲年宮の「年宮」や棧陽宮の「棧」を示すものと解釈され、鳳翔県城南一帯の豆腐村附近を雍城に比定することが可能となった。「年宮」瓦当(第1図の1)は、直径15.5cm、厚さ1.5cmの雲文円瓦当で、一般的には前漢代の瓦当と見られるが、統一時代秦の咸陽城からも類似した雲文の瓦当が発見されている。「棧」瓦当(第1図の2)は、直径18cm、厚さ2.2cmほどの雲文円瓦当の割れた半分である。寛帯部分に斜格子文が見られ、斜格子文間に「棧」の字が刻まれている。類似した雲文瓦当は、前漢の霍去病墓、元帝の渭陵などからの出土例が知られている。雍城からは、馬家荘の春秋時代1号建築址²⁴⁾、姚家崗の春秋時代凌陰遺址²⁵⁾、青銅建築部材埋設遺址²⁶⁾などの遺跡・遺構や、春秋戦国時代に属す半瓦当、円瓦当、磚、土器、玉石器などの遺物が出土し、それらは、すべて春秋戦国時代の秦雍城に伴なう遺構・遺物と考えられる。また、年宮瓦当、棧瓦当を含め、ここから出土する漢代の諸遺物は、秦滅亡後の漢代にも、ここに宮殿などの諸建築が造営されていたことを示している。この雍城址からは、第6図の5、11に示した葵文瓦当が発見されている。



1



2

第1図 雍城出土瓦当 1年宮瓦当,
2棧瓦当

遺構・遺物と考えられる。また、年宮瓦当、棧瓦当を含め、ここから出土する漢代の諸遺物は、秦滅亡後の漢代にも、ここに宮殿などの諸建築が造営されていたことを示している。この雍城址からは、第6図の5、11に示した葵文瓦当が発見されている。

推定秦櫟陽城 陝西省臨潼県武家屯附近に戦国時代秦の櫟陽城の跡ではないかと推定されている遺跡が存在する(第2図)。1963年に臨潼県武家屯管荘村の東南100mで、青銅釜が発見されたが、釜内には8枚の金餅が納められ、葵文瓦当を用いて蓋としていた²⁷⁾。この青銅釜の発見を切っ掛けとして、1964年に推定櫟陽城址の考古学的な調査が行なわれている²⁸⁾。櫟陽城については、『史記』秦本紀に、

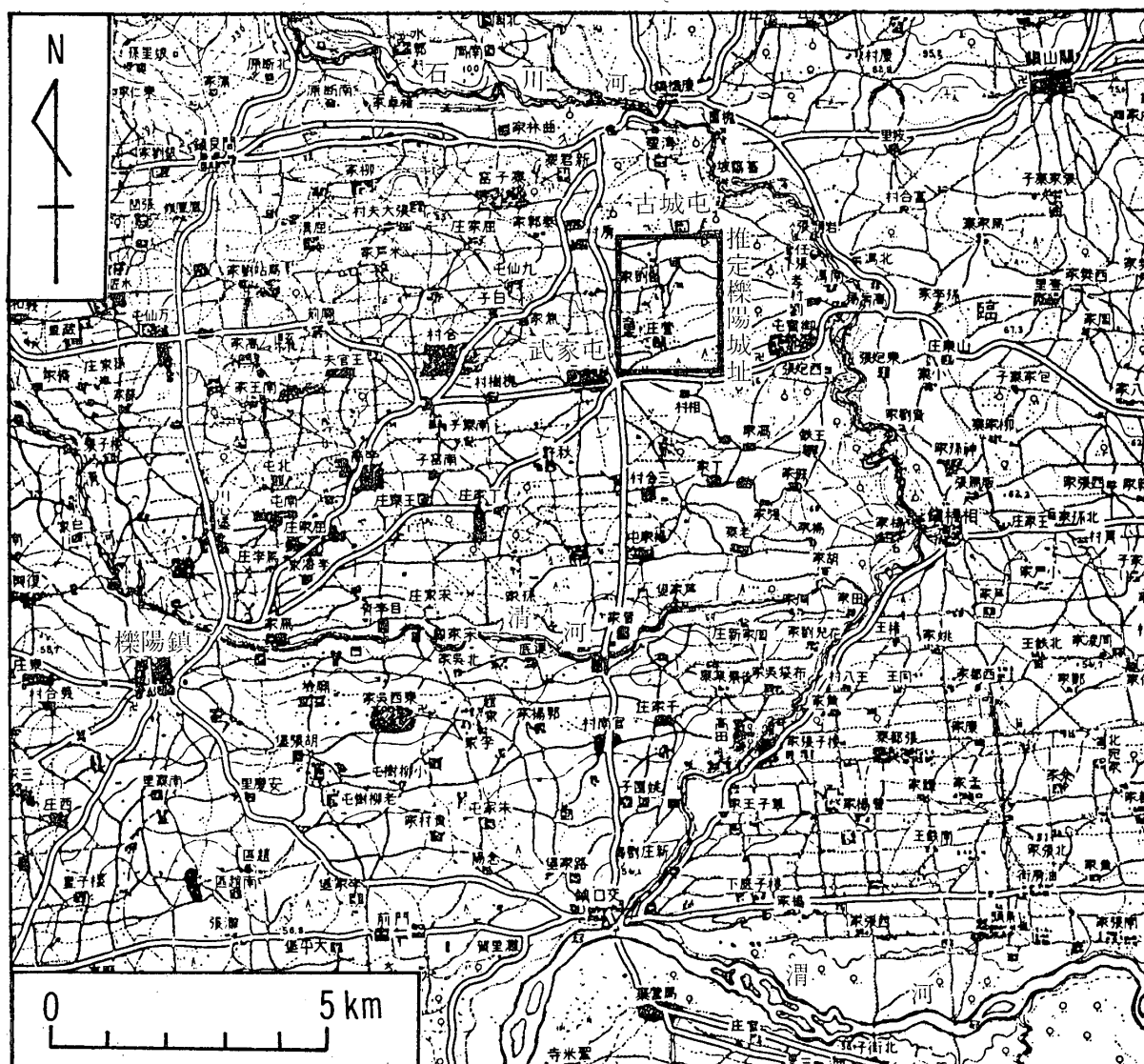
獻公元年、止從死。二年、城櫟陽。……十八年、雨金櫟陽。……獻公即位、鎮撫邊境、徙治櫟陽。且欲東伐復繆公之故地、修繆公之政令。

この記載については、獻公が即位し、辺境を鎮撫して、獻公二(前383)年に櫟陽城を築き、そこを秦の都に定め、東伐して繆公の旧領を取りかえし、繆公の政令を修めた、と解釈するのが一般的である。櫟陽城は、その後、孝公十二(前350)年に、陝西省咸陽市の「咸陽城」へ遷都するまで、34年間にわたって秦の都であったとするのが通説である。櫟陽城の築城や「雨金」に関しては、『史記』六国年表にも

獻公二年、城櫟陽。

獻公十一年、県櫟陽。

獻公十七年、櫟陽雨金、四月至八月。



第2図 推定櫟陽城址位置図

とあり、さらに『史記』封禪書には、

櫟陽雨金，秦獻公自以為得金瑞，故作畦時櫟陽，而祀白帝。

と。このように、黄金の雨が櫟陽城に降った話は、『史記』のなかにはしばしば見られる。また、戦国時代に櫟陽城が、商業活動の中心地として栄えていた様子は、『史記』貨殖列伝の

獻孝公，徙櫟邑，櫟邑北卻戎翟，東通三晋，亦多大賈。

によって知ることができる。秦の都は、孝公十二（前350）年に咸陽へ移ったとされるのが通説であるが、その後も、櫟陽は重要な都城として漢代におよんだものと考えられる。『史記』項羽本紀には、

故立司馬欣為塞王，王咸陽以東至河，都櫟陽。

とあり、また『史記』高祖本紀にも、

秦葵文瓦当考

二年，六月，立為太子。大赦罪人。令太子守櫟陽，諸侯子在關中者，皆集櫟陽為衛。……四年，西入關，至櫟陽，存問父老置酒。梟故塞王欣頭櫟陽市。留四日，復如軍，軍廣武。……七年，二月，高祖自平城過趙，雒陽至長安。長樂宮成。丞相已下徙治長安。……十年，七月，太上皇崩櫟陽宮。楚王，梁王，皆來送葬。赦櫟陽囚。

と、『漢書』高帝紀には、

項羽，立秦三將，章邯為雍王，都廢丘，司馬欽為塞王，都櫟陽，董翳為翟王，都高奴。……漢二年，十一月，漢王還歸，都櫟陽，……七年，二月，自櫟陽徙都長安。

と、『三輔黃圖』にも、

漢太上皇陵，高帝葬太上皇於櫟陽北原。

などの記載がある。これらの史料によって、櫟陽の地は、秦の滅亡後も、漢・楚の戦いの中で、高祖と項羽にとってきわめて重要な都城であったことが知られる。項羽は秦の降将であった司馬欣を塞王として櫟陽に都させ、漢にあたらせた。また高祖も、漢二（前205）年に櫟陽を都と定めている。この漢櫟陽の位置は、秦の櫟陽城と同一地点と考えられるが、秦櫟陽城の位置に関しては、一般に陝西省臨潼県の東北、あるいは、臨潼県櫟陽鎮の東北に存在すると言われている²⁹⁾。『括地志』には、

櫟陽故城，一名萬年城，在雍州東北百二十里櫟陽，漢七年，分櫟陽城内，為萬年県。

また、『史記』項羽本紀の司馬欣を塞王とし、櫟陽に都した記載に関し、『正義』は、『括地志』を引いて、

櫟陽故城，一名萬年城，在雍州櫟陽東北二十五里，秦獻公之城櫟陽，即此也。

とある。『讀史方輿紀要』陝西，西安府，臨潼県には、

漢櫟陽城，在今櫟陽東北二十五里。

とある。

雍州櫟陽，つまり現在の櫟陽鎮の東北二十五里は、現在の武家屯附近にあたりと考えられる（第2図）。従って、陝西省文物管理委員会が、『文物』1966年第1期に、「秦都櫟陽遺址³⁰⁾」として報告した城址は、たしかに櫟陽城址である可能性の高い遺跡である。この城址は、陝西省臨潼県武家屯の北東に位置し、遺跡は付近の関莊，新義，東西党家，南丁，華劉，管莊，湯家，古城屯，房村の各村落に広がりをもつ。版築の土城壁で囲まれた区域は、東西1,801m，南北2,232mの長方形を呈している。城址の北から東には石川河が流れ、南5kmには清河が流れ、南10kmで渭河に達する。城の中央には南北に走る1本の道路があり、北壁，南壁の城門に達している。また、東西に走る2本の道路も存在し、それぞれ、東壁，西壁に城門を持っている。城内からは、7ヶ所の建築址，水路，土塚などの遺構が発見されている。建築址からは、陶水道管，瓦当，磚，土器片，陶井圈，鉄鏟，鉄滓，焼土などの遺物が発見され、金餅や青銅釜の出土もあった。この推定櫟陽城址から出土する瓦当は、円瓦当で、特徴のある葵文瓦当と雲文瓦当が存在する。

この推定秦櫟陽城に対しては、これを秦都櫟陽城とすることを疑問視する王子今氏の説が存在す

る⁸¹⁾。王子今氏が、臨潼県武家屯の城址を秦都と認めない理由はいくつかあるが、最大の根拠の一つに、『史記』商君列傳の、

將兵田魏安邑降之，居三年，作為築冀闕宮庭於咸陽，秦自雍徙都之。

という記載がある。つまり、この記載によれば、秦の都は雍城から直接、咸陽城に遷都したことになる。王子今氏は、『史記』秦本紀の「獻公二年，城櫟陽」は、単に櫟陽に城を築いたことを意味し、都を定めたとは解釈できない、との説を述べていられる。筆者は、武家屯の推定櫟陽城址をして、獻公二（前383）年から孝公十二（前350）年に至る間の秦の国都であったと断定する勇氣を持たないが、秦の重要な都城であったことは間違いのないところであると考えている。さらに述べれば、推定櫟陽城址を秦の国都と断定しないまでも、その可能性が強いものと考えている。この小論にとって重要なことは、推定櫟陽城から多くの葵文瓦当が出土し、その年代が、獻公二（前383）年の築城以降の年代に比定できることにある。

秦咸陽城 秦都咸陽城の位置に関しては、長年にわたって明確ではなかった。1959年から1961年にかけて、陝西省咸陽市の東方10kmの渭河の北岸の長陵車站付近の考古調査が行なわれ、窯店鎮を中心とする一帯が、秦咸陽城の跡ではないかと考えられるようになった⁸²⁾。咸陽城に関しては、『史記』秦本紀に、

孝公十二年，作為咸陽，築冀闕，秦徙都之。

と見られ、孝公十二（前350）年に、秦の都が咸陽に定められたことが知られる。一般には、櫟陽城から、咸陽城への遷都と解釈されているが、先に引用したように『史記』商君列傳には、咸陽に宮殿、正門などを築き、秦が雍城から咸陽城へ都を移した、との記載も見られる。いずれにしろ、前4世紀の中葉の前350年に、咸陽が秦の都となったことは、間違いのないところであろう。咸陽は、秦始皇帝が、中国統一をはたした前221年以降さらに栄えたが、漢元（前206）年、項羽が咸陽を屠り、秦の宮室を焼くに至って廢墟に化したものと思われる。咸陽城では、戦国時代、統一時代を通じて宮殿、その他の建造がすすんだと考えられ、『史記』秦始皇本紀には、秦統一直後の咸陽造営の様子を記載し、

二十六年，秦初并天下。……収天下兵聚之咸陽，銷以為鍾鐻・金人十二。重各千石，置廷宮中。……徙天下豪富於咸陽十二萬戶。諸廟及章臺・上林，皆在渭南。秦每破諸侯，写放其宮室，作之咸陽北阪上，南臨渭。自雍門以東，至涇渭，殿屋・複道・周閣相属。所得諸侯美人・鍾鼓，以充入之。……二十七年，作信宮渭南。已更命信宮為極廟，象天極，自極廟道通酈山。作甘泉前殿，築甬道，自咸陽属之。

と見られ、咸陽へ遷都以降、咸陽城および近郊に造営されてきた冀闕、諸廟、章臺、上林、雍門、信宮、甘泉前殿などの建造物の名称を知ることができる。咸陽城で最も重要な宮殿の一つであったと思われる咸陽宮については、『史記』刺客列傳、荆軻に、

秦王聞之大喜，乃朝服設九賓，見燕使者咸陽宮，

と出てくるが、これは前227年のことである。この咸陽宮に関しては、1974年から1975年に調査さ

秦葵文瓦当考

れた秦都咸陽第1号宮殿建築遺址をそれに比定する考え方がある³³⁾。この咸陽第1号宮殿址からは、多くの雲文瓦当と共に、葵文瓦当も出土している。このように咸陽城に関しては、多くの記録が残り、また、咸陽宮に推定される遺構も発見されているが、咸陽城の占める範囲については、概略しか判明していない。その位置は、陝西省西安市北西の漢長安城の北側、渭河北岸の陝西省咸陽市窯店鎮を中心とした東西約7km、南北約7kmの範囲内と推定され、東は柏家嘴から西は毛王溝、北は高幹渠から南は渭河南岸の西安市草灘農場の各地点を含むものと考えられている³⁴⁾。特に渭河北岸の咸陽市窯店鎮付近から東の劉家溝村にかけては多くの建築址が発見されている。すでに調査された建築址には、先に紹介した窯店鎮牛羊村の第1号宮殿址のほか、同じ窯店鎮牛羊村の第3号宮殿址などがある³⁵⁾。

秦都咸陽城址と推定される地域からは、戦国時代から統一時代の秦に属すと思われる多くの遺物が発見されている。それらには、建築材料である葵文瓦当、雲文瓦当、板瓦、磚、陶水道管、陶井戸枠、蝶番などの青銅品や壁画残片をはじめとして、鬲、罐、釜、壺、盆などの土器、半兩銭、金餅などの貨幣、戈、矛、鏃などの青銅武器類、鑑、盆、釜などの青銅容器と、多種多様の遺物が含まれている。そのなかで、窯店鎮を中心とした一帯を秦都咸陽城址に比定する有力な手掛となっている遺物は、多量に出土する陶文である。それらの陶文には、この地が咸陽であることを示す「咸陽」「咸原」「咸邑」「咸亭」などの文字が見られる(第3図)。第3図の1～5は、陝西省咸陽市窯店鎮牛羊村の咸陽第1号宮殿址出土の陶文であるが、4は板瓦に、5は磚に刻されたものである³⁶⁾。第3図の6～10は咸陽市灘毛村の南の窯址群出土の陶文である³⁷⁾。第3図の11, 12は、1959年から1961年の秦都咸陽城址の調査の時に、咸陽市灘毛村から劉家溝へかけての一帯で発見された陶文である³⁸⁾。それぞれ、「咸陽成申」「咸里芮喜」「咸原小嬰」「咸邑如頃」「秦」「咸里鄜駟」「咸亭陽安辟器」「咸里鄜跄」「咸里□貝」「咸小鄜有」「咸亭沙寿□器」「咸陽巨亭」(第3図1～12)とある。まさに咸陽市窯店鎮を中心とした灘毛村、牛羊村、劉家溝村の付近一帯が、秦都咸陽城であったことを示す好資料と見てよいであろう。

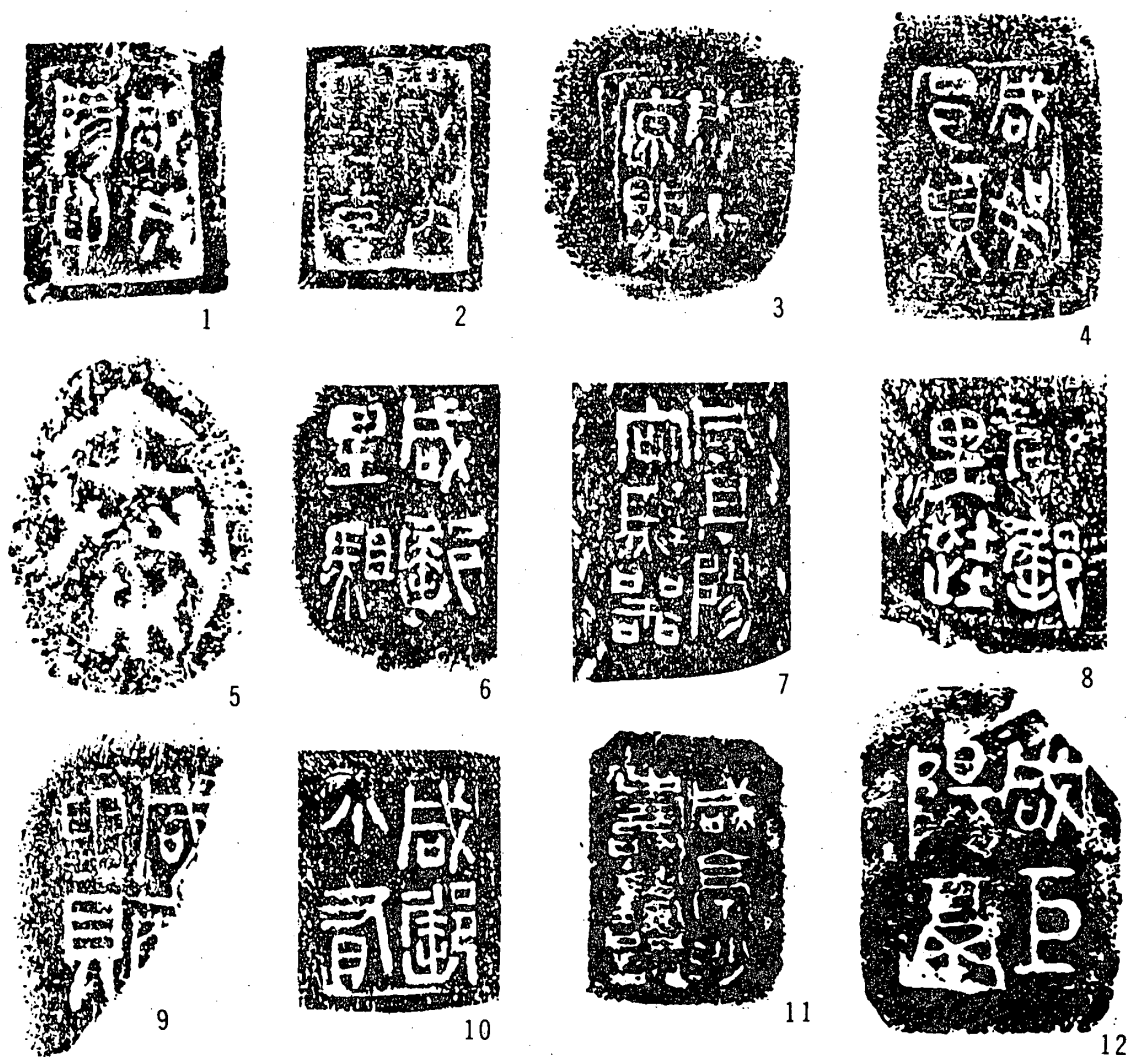
秦都咸陽城の南郊に存在したとされる陝西省西安市の阿房宮址からも葵文瓦当が出土している。阿房宮は、秦始皇帝三十五(前212)年に、朝宮を上林苑につくり、その前殿として造営されたものと伝えられ、周囲に閣道があって、渭水を渡って咸陽に通じる復道があったという。『史記』秦始皇本紀には、

三十五年、乃宮作朝宮渭南上林苑中。先作前殿阿房。東西五百步，南北五十丈，上可以坐萬人，下可以建五丈旗。周馳為閣道，自殿下直抵南山。表南山之顛以為闕。為復道，自阿房渡渭，屬之咸陽，以象天極閣道，絕漢抵宮室也。阿房宮未成。成欲更擇令名名之。作宮阿房。故天下謂之阿房宮。

と見られる。阿房宮について『三輔黃圖』は、

阿房宮亦曰阿城，惠文王造宮未成，而亡。始皇廣其宮，規恢。

とあって、阿房宮が、秦恵文王(前338～前311年)の造営した宮殿を引き継いで建てられたことを



第3図 秦都咸陽城出土陶文

述べている。今日、西安市の西方約15kmの三橋鎮の南に、秦阿房宮址と言われる土壇が残っているが、ここから出土したと伝えられる葵文瓦当が、中国歴史博物館に収蔵されている。

大いに栄えた秦都咸陽城であったが、漢元（前206）年、項羽が咸陽に入り、火をはなつにいたって、秦都咸陽城は滅んだ。『史記』高祖本紀には、

項羽遂西，屠燒咸陽秦宮室。所過，無不殘破。

と見える。

四 葵文瓦当

以上紹介してきた雍城，推定櫟陽城，咸陽城，阿房宮址などの遺跡から出土した葵文瓦当の瓦当文様に対して型式分類を行ない，遺跡との関係において，それぞれの葵文瓦当の年代についても検討を加えてみる。今日知られる葵文瓦当には，出土資料以外に，博物館等に収蔵されているものや，

秦葵文瓦当考

著録にのみ見られるものも存在するので、それらも含めて論述してみたい。知られる限りの葵文瓦当の拓本、写真を第4図、第5図、第6図に示し、それらを4つの「型」に分け、さらに型式ごとに細分して、「式」で式別した³⁹⁾。

I型（第4図の1～8、第6図の1～4） 基本的には複線の葵文をもつものである。圏線から外区と内区に葵文が出るのが一般的であるが、外区にのみ葵文の見られるものもある。

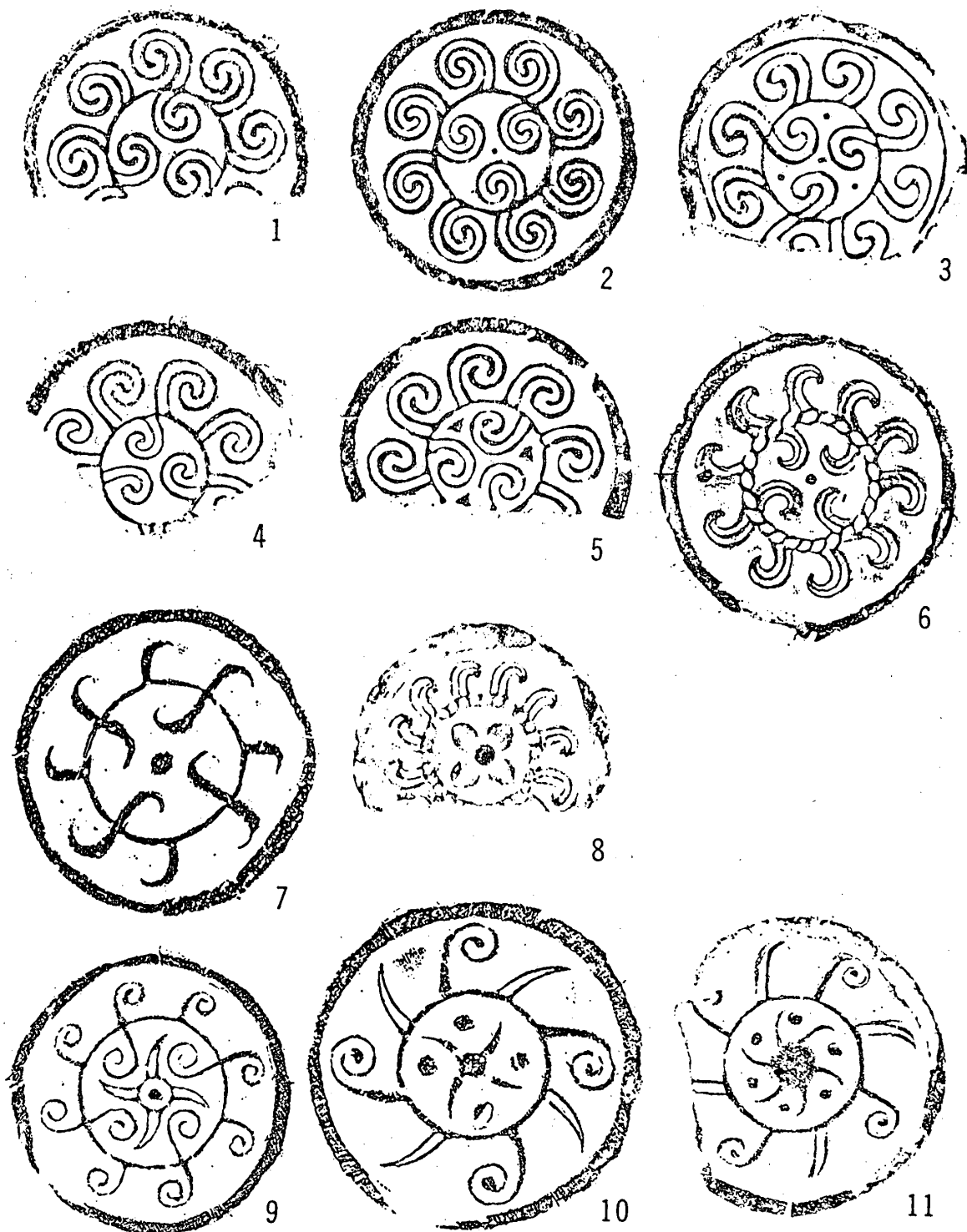
I型1式（第4図の1～3） この型式の基本形は、円形瓦当面が圏線によって内区と外区に分れ、内区に3本の左巻複線葵文が出、外区に8本の左巻複線葵文が出る。1～3は、いずれも陝西省臨潼県武家屯附近の推定櫟城址から出土したものである⁴⁰⁾。瓦当面の直径は15cmほどであるが、2は直径15.2cmが計測されている。1は内区の葵文間は素文であるが、2は中心に1点の小乳が施され、3は4点の小乳が認められる。

I型2式（第4図の4・5） この型式は、複線葵文の巻込がI型1式とは逆の右巻になる。基本形は、円形瓦当面が圏線によって内区と外区に分れ、内区に3本の右巻複線葵文が出、外区に8本の右巻複線葵文が出る。4、5は、いずれも陝西省臨潼県武家屯附近の推定櫟陽城址からの出土である。いずれも瓦当面の直径は15cmほどで、4の内区葵文間が素文であるのに対し、5には三個の三角点文が認められる。

5は、1963年に武家屯管荘村で発見された青銅釜の蓋に利用されていた瓦当である。この青銅釜内には、8個の金餅が納められ、その一つには「益兩半」の刻銘が刻られていた。蓋に用いられていた5の葵文瓦当の年代との関連で重要な意味をもたらしてくるのが、青銅釜である。関野雄博士は、この青銅釜を前漢の遺物と見ておられる⁴¹⁾。たしかに双耳青銅釜は、前漢の遺構、遺物にも伴なう容器ではあるが、比較的古い戦国時代からの使用も認められる。四川省巴県冬筍壩の船棺墓21基のうち、M2、M5、M7、M8、M18、M9、M10、M11の8基の墓は、前4世紀末まで溯る可能性があるという⁴²⁾。これら8基の墓からは、すべて青銅釜が出土している。『四川船棺葬発掘報告』中に、冬筍壩出土として図版34に示された青銅釜が、先の8基の墓に属す遺物か否かについては不明であるが、形状は、武官屯管荘村出土の青銅釜にきわめて類似している。また、四川省成都の羊子山第172号墓からも、蓋をもつ青銅釜が出土している⁴³⁾。この墓の年代決定は難しいが、埋葬時の年代は別として、副葬されていた鼎、盃、爐、簋、壘などの青銅器は、前4世紀まで溯りうる器形を示し、青銅釜も前4世紀まで溯らせることが可能である。このように見てくると、武家屯管荘村の青銅釜も前4世紀ぐらゐまで溯る可能性があり、第4図の5に示したI型2式の葵文瓦当も、前4世紀の遺物である可能性が強くなってくる。この前4世紀は、武家屯附近に秦の櫟陽城が営まれていた時代（前383～前350年）にあたる。

I型1・2式の瓦当の年代については、推定櫟陽城の年代から割出して、前4世紀の年代を推定したい。

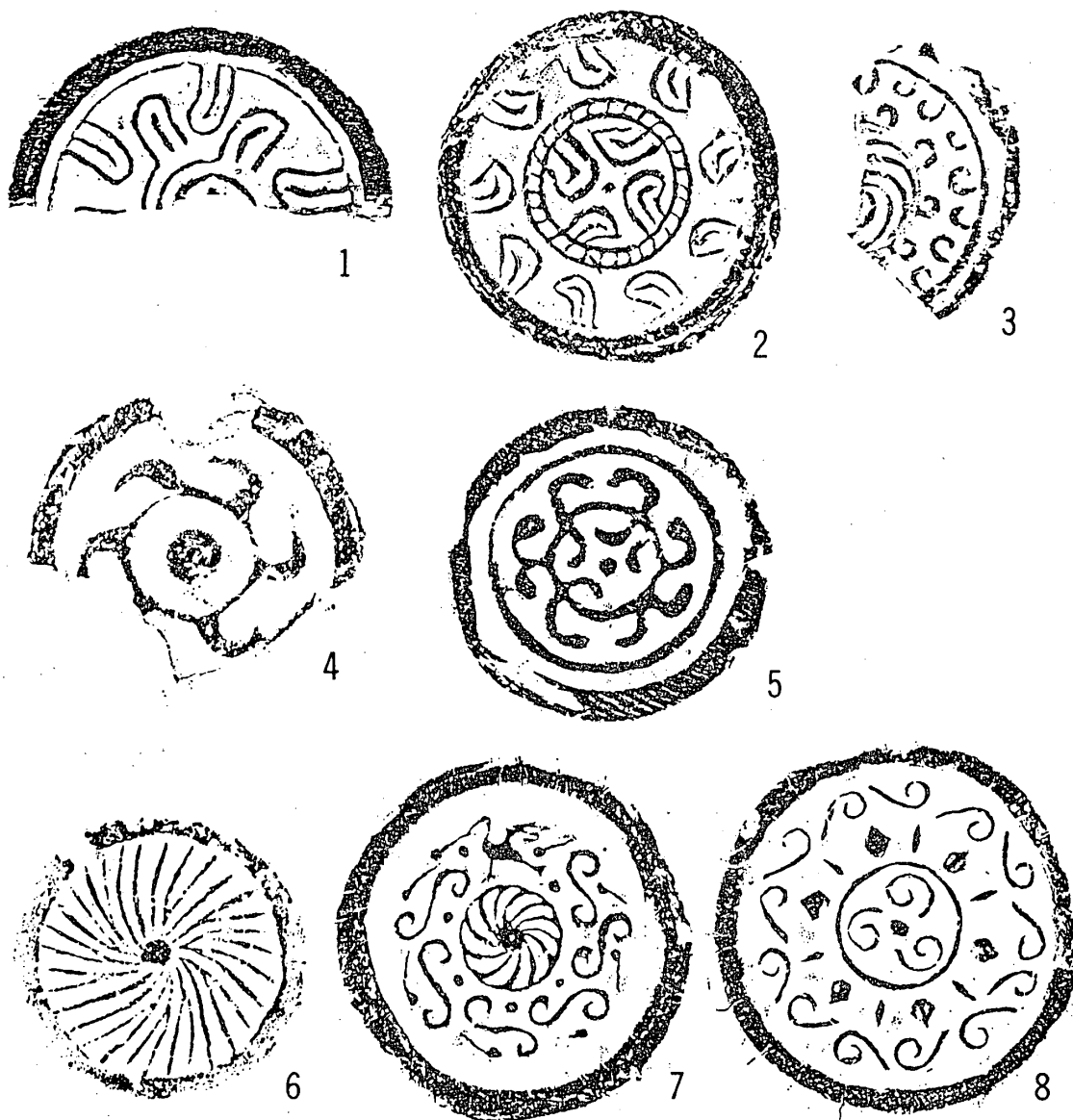
I型3式（第4図の6、第6図の1～3） この型式の基本形は、円形瓦当面が縄状あるいは複線の圏線によって内区と外区に分けられ、3本線の右巻葵文が内区に4本、外区に8本（第6図の



第4図 葵文瓦当 1~3 I型1式, 4・5 I型2式, 6 I型3式, 7 I型4式,
8 I型6式, 9 II型2式, 10・11 II型3式

3.) あるいは10本（第4図の6，第6図の1）あるいは12本（第6図の2）出る形である。いずれも内区の中に1点の小乳が存在する。第4図の6（第6図の1）は，陝西省咸陽市の窯店鎮付近

秦葵文瓦当考



第5図 葵文瓦当(1~5), 参考秦瓦当(6~8)

1Ⅲ型1式, 2Ⅲ型2式, 3Ⅲ型4式, 4Ⅳ型1式, 5Ⅳ型2式,
6輻射文瓦当, 7雲鳥文瓦当, 8変形雲文瓦当

で採集された瓦当で⁴⁴⁾, 直径は14.5cm, I型3式の典型である。現在, 咸陽市博物館に収蔵されている。第6図の2は, 西安市三橋鎮の南の阿房宮址で発見された瓦当で, 瓦当面の直径は約11cmである。第6図の3は, 関野貞博士が, 「支那の瓦及び磚」「瓦」に載せられた瓦当であるが, 筆者のI型3式に属す瓦当である⁴⁵⁾。

I型3式の瓦当に関しては1点(第4図の6, 第6図の1)が秦都咸陽城内の窯店鎮付近での採集で, 別の1点(第6図の2)が阿房宮址出土と伝えられている。咸陽城への遷都は, 孝公十二(前350)年で, 阿房宮の造営は, 秦始皇帝三十五(前212)年に開始され, 項羽による咸陽城の焼滅が, 漢元(前206)年である。I型3式の葵文瓦当は, 前4世紀後半から, 前3世紀末の間に入ること

は確かである。ことに第6図の2は、前3世紀末の可能性が強いように思われる。

I型4式（第4図の7） この型式の葵文は単線であるが、瓦当面の図案が第6図の3（I型3式）の伝統を受継いでいるので、I型4式とした。円形瓦当面は、圏線によって内区と外区に分かれ、内区に4本の単線葵文が出、外区に8本の単線葵文が出ている。内区中央に1点の小乳が存在し、7の瓦当面の直径は16cmである。『秦漢瓦当』に拓本が掲載されている⁴⁶⁾。このI型4式の瓦当文様は、内区に4本、外区に8本の葵文を有し、内区と外区を結ぶ4本の葵文がS字形を呈している。このような基本図案は、I型4式のほか、I型3式および、II型1式、II型2式にも見られる。この種の図案を持つこの4つの型式の瓦当は、比較的接近した時代の遺物かもしれない。II型2式は、咸陽第1号宮殿址出土の遺物で、その点からは、I型4式の年代を咸陽時代（前350～前206年）の遺物と見ることができ、まず前3世紀のものとなしたい。

I型5式（第6図の4） 円形瓦当面は、縄状圏線によって内区と外区に分れるが、内区は小円である。内区には4単位の鋸歯文が施され、外区には3本線の葵文が9本出ている。4の瓦当面の直径は約11cmである。西安市阿房宮址の出土と伝えられるが、年代は前3世紀末のものか。

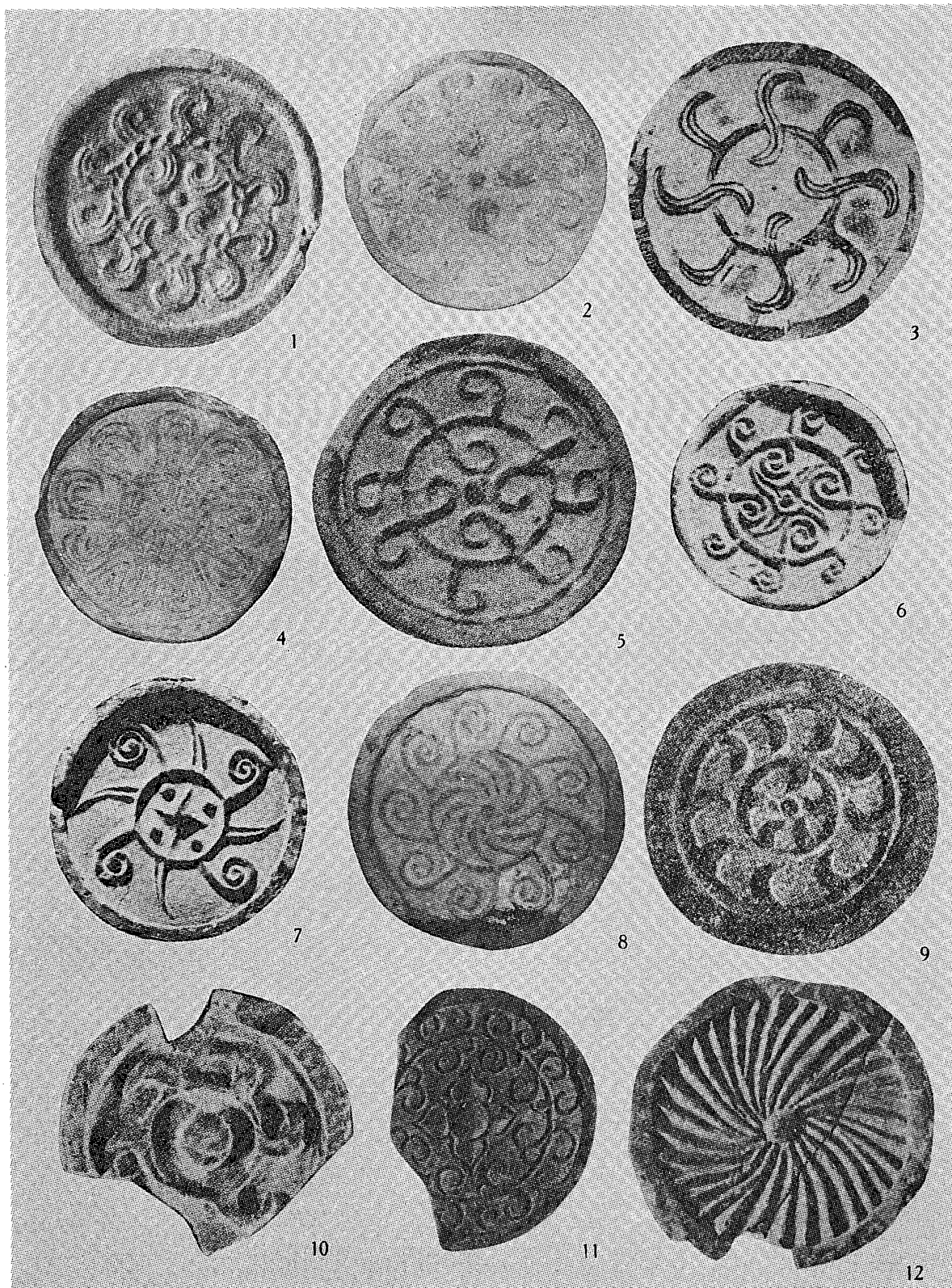
I型6式（第4図の8） 瓦当面は、縄状圏線によって内区と外区に分けられる。内区中央には1点の小乳が存在し、小乳を取囲む四葉文が施されている。縄状圏線から外区に出る葵文は、花卉形葵文に近い形を呈している。第4図の8の瓦当は、直径約12cmほどで、咸陽市窯店鎮付近での採集品と伝えられる⁴⁷⁾。年代を決定する積極的な手掛を欠くが、縄状圏線と四葉文を目安にすると、I型3式、I型5式と同時代かやや年代の下る時期と見ることができ、また四葉文は秦統一時代以降の雲文瓦当にしばしば見られる文様である。いくつかの状況証拠からは、前3世紀末の遺物と推定される。

II型（第4図の9～11、第6図の5～8） 基本的に単線の葵文をもつもので、圏線あるいは中房から剣文が出ることを特徴とする遺物もある。

II型1式（第6図の5） この型式の瓦当は、円形瓦当面が、圏線によって内区と外区に分かれ、内区に4本の単線葵文が施され、外区に8本の単線葵文が施されている。外区と内区を結ぶ4つの葵文はS字形あるいは逆S字形を呈し、内区中央に1点の小乳が存在する。5の瓦当は、陝西省鳳翔県の秦都雍城址から出土したものである⁴⁸⁾。年代を決める積極的な手掛りはないが、雍城は、獻公二（前383）年に、櫟陽城へ遷都した後も、孝公、昭王の時代に宮殿の造営があいつぎ、また始皇帝時代にも秦の都城として重要な役割をはたしていることが知られる。II型1式の葵文瓦当は櫟陽城には見られないで、むしろ、咸陽第1号宮殿址から出土するII型2式（第4図の9、第6図の6）などに近い。従って、II型1式瓦当は、咸陽城遷都後の遺物と考えるのが妥当と思われ、その年代は、おおよそ前4世紀後葉から前3世紀に属すと推定される。

II型2式（第4図の9、第6図の6） 円形瓦当面は、圏線によって内区と外区に分れ、内区には4本の単線葵文が、外区には8本の単線葵文が巻出している。外区と内区を結ぶ4本の葵文はS字形を呈し、内区の中央に中房と中房内の小乳が存在する。中房からは4本の剣文が凸出している。

秦葵文瓦当



第6图 葵文瓦当，辐射文瓦当 1~3 I型3式，4 I型5式，5 II型1式，
6 II型2式，7 II型3式，8 II型4式，9 III型3式，10 IV型1式，11
IV型3式，12 辐射文瓦当

第4図の9(第6図の6)は直径16cmで、咸陽第1号宮殿址から出土している⁴⁹⁾。第1号宮殿址は咸陽宮の可能性が考えられている建物である。咸陽宮は秦昭王の時代(前307~前251年)に造営されたとも言われているが、始皇帝の時代(前247~前210年)により拡大が行なわれ、十分な修繕を行なったと考えられる。いずれにしろ、咸陽宮は、前3世紀に利用されていた宮殿である。以上の理由を踏えると、Ⅱ型2式葵文瓦当の年代は前3世紀と推定されてくる。

Ⅱ型3式(第4図の10・11, 第6図の7) この型式は、内区に葵文が存在しない。円形瓦当面は圏線によって内区と外区に分れ、内区中央に中房または小乳が存在する。中房からは4本ないし6本の剣文が凸出し、内区の剣文間には、4個ないし6個の小乳が存在する。外区には、圏線から4本の単線葵文と4本の剣文が出ている。第4図の10は、直径19cmである。第6図の7は、第4図の10と回転方向が逆であるが、同一の図案である⁵⁰⁾。第4図の11は、直径約18.8cmである。ここに示したⅡ型3式の瓦当は、いずれも咸陽第1号宮殿址からの出土遺物である。Ⅱ型3式の年代も前3世紀と推定されるが、Ⅱ型2式より退化的傾向が認められるので、前3世紀中・後葉と考えたい。

Ⅱ型4式(第6図の8) 円形瓦当面の圏線に区切られた内区が、中心の小乳から回転する放射文によって埋められている。外区には、9本の単線葵文が出ている。この内区内に見られる放射文のみを円形瓦当面に施した放射文瓦当(第5図の6, 第6図の12)が、雍城から出土している⁵¹⁾。秦統一時代から漢代の遺物ではないかと思われるが、細かな年代は不明である。また、西安市文物管理委员会収蔵の雲鳥文瓦当(第5図の7)にも第6図の8に類似した内区の放射文が認められ、秦統一時代の遺物と言われているが、確かな年代は不明である。第5図の3に示したⅢ型4式の瓦当は⁵²⁾、第7図の2のごとき文様と思われ、これにも内区の放射文が存在する。咸陽市窯店鎮での採集品で細かな年代はわからない。第6図の8は直径約11cmで、阿房宮址の出土と伝えられる。前3世紀末に属す可能性が強いと思われる。

Ⅲ型(第5図の1~3, 第6図の9) この型式の瓦当文の特徴は、周縁から外区に凸出する葵文が存在することである。内区には葵文のあるものと、放射文などの他の文様で埋められるものとが存在する。葵文は花卉形のものが多い。

Ⅲ型1式(第5図の1, 第7図の1) 「秦都櫟陽遺址初歩勘探記⁵³⁾」に半円形の瓦当拓本が示された資料で、直径は14.8cm、瓦当面には朱が塗られているとのことである。三上次男氏は、この瓦当を半瓦当と見ていられるが⁵⁴⁾、筆者は、左右の花弁形の葵文が割れていることと、この瓦当が半円形より若干小型である点から、円瓦当の破片と見た。瓦当面を復原すると第7図の1のごとき円形葵文瓦当になる。瓦当面は、外区と内区に分かれるように見えるが、圏線は存在しない。周縁から5本の花弁形葵文が凸出し、内側からも5本の花弁形葵文が凸出している。内側の花弁形葵文の1端は尾状にのびて、5本の尾が巴形に回転し、内区を形成している。Ⅲ型1式は、縄状圏線をもつⅢ型2式よりは古手の型式と考えられる。櫟陽城時代(前383~前350年)に属す前4世紀の瓦当と見てよいであろう。

秦葵文瓦当考

Ⅲ型2式(第5図の2) 円形瓦当面は、縄状圏線によって内区と外区に分けられる。内区には4本の花弁形葵文と、中心に1点の小乳が存在し、外区には周縁から出る9本の花弁形葵文が見られる。2の瓦当は、直径13.8cmで、『秦漢瓦当』に拓本が示されている⁵⁵⁾。年代を決める積極的手掛りに欠けるが、葵文の形状はⅢ型1式に類似し、Ⅲ型2式は、形式的に、Ⅲ型1式とⅢ型3・4式の間にくるものと考えられる。Ⅲ型2式のごとき縄状圏線は、Ⅰ型3式、Ⅰ型5式、Ⅰ型6式、Ⅲ型4式などの葵文瓦当に見られる。Ⅲ型1式が前4世紀に属し、後述するⅢ型4式の瓦当が輻射文の関係で前3世紀末とするなら、Ⅲ型2式(第5図の2)の瓦当は、前3世紀前・中葉の遺物と推定される。

Ⅲ型3式(第6図の9) この型式の文様配列は、Ⅲ型2式に似るが、2式の花弁形葵文が、3式においては爪形に近い葵文になっている。内区には、圏線から5本の爪形葵文が凸出し、中心に1点の小乳が存在する。外区には、周縁内側の圏線から凸出する9本の爪形葵文が見られる。9の瓦当は、咸陽市灘毛村南の窯址群から出土したもので、直径13.5cmの大きさである⁵⁶⁾。咸陽城に伴う遺物と考えられ、層位的には確かでないが、伴出している土器や陶文(第3図の6~10)、半両銭などから秦統一時代前後の遺物と見られ、その年代を前3世紀後葉と推定したい。

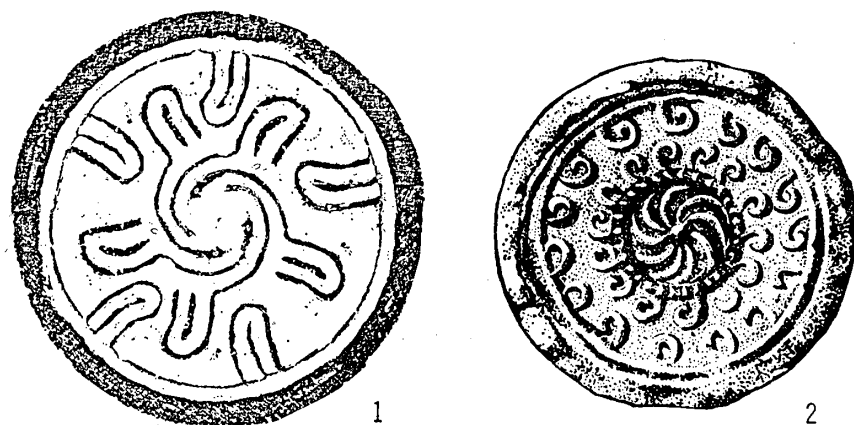
Ⅲ型4式(第5図の3) 咸陽市窯店鎮で採集された瓦当破片であるが、『中国古代建築史』に類似した瓦当の図が示されている(第7図の2)⁵⁹⁾。第5図の3と第7図の2は、葵文の巻込方向が左右逆であるが、基本的な図案は同一と思われる。縄状圏線によって内区と外区に分れ、内区には輻射文が置かれ、外区には、縄状圏線と周縁内圏線から出る短かい葵文が見られる。輻射文をもつ瓦当には、第5図の6(第6図の12)に示した雍城出土の輻射文瓦当をはじめとして、Ⅱ型4式(第6図の8)、雲鳥文瓦当(第5図の7)があり、Ⅱ型4式については、前3世紀末と考えた。また縄状圏線をもつ瓦当には、Ⅰ型3式(第4図の6)、Ⅰ型5式(第6図の4)、Ⅰ型6式(第4図の8)などがある。Ⅰ型5・6式葵文瓦当については、前3世紀末と考えた。第5図の3に示したⅢ型4式の瓦当も前3世紀末の可能性が強いと考えてよいであろう。

第5図の8に示した瓦当は、『秦漢瓦当⁵⁸⁾』に雲文瓦当として拓本の載っているものである。Ⅲ型系列の最末期的な型式とも見えるので、参考として図を示しておく。

Ⅳ型(第5図の4・5、第6図の10・11) この型式の瓦当は、以上述べてきたⅠ・Ⅱ・Ⅲ型の系列に含まれないものである。従って、Ⅳ型1・2・3式の名称を与えてはいるが、それぞれの間相互関係は認められない。

Ⅳ型1式(第5図の4、第6図の10) 外区に6本の太い葵文が存在し、葵文は圏線から出ている。内区中央の中房は、凸瘤となっている。この瓦当は咸陽1号宮殿址から出土したもので、直径約17cmほどの大きさである⁵⁹⁾。咸陽1号宮殿址に伴う遺物と考えられるが、年代に関する詳細は不明である。一般論としては秦統一時代の前3世紀末に属す可能性が強いであろう。

Ⅳ型2式(第5図の5) この瓦当は、Ⅰ型3式の流れを受けた葵文瓦当とも見られるが、Ⅰ型の基本である複線葵文ではなく、文様図案も著しく乱れているのでⅣ型に入れた。圏線によって内



第7図 葵文瓦当復原図 1Ⅲ型1式, 2Ⅲ型4式

区と外区に分れ、内区には4本の不規則な葵文と、中心の小乳が存在する。外区に出る葵文も不規則で、葵文の回転方向も左右まちまちである。直径は12cmである。この瓦当は、『秦漢瓦当⁶⁰⁾』に拓本が示されているが、出土地、年代の詳細は不明である。形式的には、Ⅰ型4式よりはるかに遅い時期のものと思われ、前3世紀末のものかもしれない。

Ⅳ型3式(第6図の11) 中房は四葉文によって縁どられ、圏線からは内区と外区に葵文(蕨手文・唐草文)がのび、文様はきわめて優美である。この葵文瓦当は、Ⅰ型・Ⅱ型・Ⅲ型とはまったく別系統の文様で、知られる限りでは、これ一点のみが出土している。大きさは、直径14cmで、雍城からの出土品である⁶¹⁾。年代については不明であるが、四葉文を重視すれば、秦統一時代・前3世紀末の可能性が強く、また、葵文の写実性を、雍城出土の鹿文瓦当の写実性と同一のものと見ると、前4世紀から前3世紀前葉の可能性も絶無ではない。

五 葵文瓦当に関するまとめ

雍城、推定櫟陽城、咸陽城および咸陽城近郊から出土した葵文瓦当と、若干の収藏品や著録に見られる葵文瓦当について、型式分類と年代の検討を試みた。型の上で葵文瓦当を4つに分けたが、これは、筆者が葵文瓦当について検討を加える上で必要なために分類したもので、さらに今後、実体にあつた分類が必要と思われる。

Ⅰ型は、複線葵文が圏線から外区と内区に出る形を基本形としている。Ⅰ型は、葵文の展開の内容によって、さらに6式に分類した。Ⅰ型1式は葵文が左回転するもの、Ⅰ型2式は右回転するもので、Ⅰ型1・2式は、推定櫟陽城から出土する。この型式の瓦当は、別名として櫟陽型瓦当と呼ぶこともできる。年代的には、櫟陽城の年代と対応した時期を考えることができる。しかし、Ⅰ型1・2式の瓦当の年代を前383年と前350年の間に限るのは難かしく、下限に幅を持たせて、前4世紀の瓦当と推定した。雍城から出土する鹿文瓦当・虎文瓦当・双獣文瓦当・夔鳳文瓦当などは、すべて前4世紀を中心とした年代が考えられる。ほぼ同じ時代に、図柄の異なった瓦当が利用されていたと思われ、都城あるいは、宮殿の性格によって用いる瓦当の図案を選択したのと考えてよい

秦葵文瓦当考

であろう。雍城から出土する鹿文瓦当・虎文瓦当・双獣文瓦当・夔鳳文瓦当などの鳥獣文は、写実的な図柄で、洗練された優美な作品である。同じように、推定櫟陽城から出土するⅠ型Ⅰ式の葵文瓦当も、洗練された優美な瓦当である。秦統一時代前の秦国の力強い文化内容を暗示する遺物と見ることができる。Ⅰ型Ⅲ式は咸陽城や阿房宮からの出土が知られ、前4世紀後半から前3世紀の瓦当と思われる。Ⅰ型Ⅳ式の瓦当文様は、Ⅰ型Ⅲ式から変化したものと推定されるが、同時にⅡ型Ⅰ式やⅡ型Ⅱ式と同じ葵文の展開を見せる。圏線を挟んで、外区と内区の葵文がS字形を呈す手法は、前3世紀ごろの葵文瓦当の一つの特色と見てよいであろう。Ⅰ型Ⅴ・Ⅵ式は複線葵文あるいは花卉形葵文を有すもので、輻射文や四葉文が併用され、前3世紀末の遺物と推定される。Ⅰ型葵文瓦当としては、最末期的なものであろう。

Ⅱ型は、単線葵文が、圏線から外区と内区に、あるいは外区にのみ出る形を基本形とし、中房や圏線から剣文が凸出する図案も特徴的である。Ⅱ型Ⅰ式は内区に4本の単線葵文が施され、外区に8本の単線葵文が見られる。Ⅱ型Ⅰ式をⅡ型葵文瓦当の中では古手のものと推定して、前4世紀後葉から前3世紀の年代を仮定してみた。Ⅱ型Ⅱ式は、Ⅱ型Ⅰ式の内区中央に中房を設け、4本の剣文を内区に凸出させた文様である。これがⅡ型Ⅲ式になると、さらに圏線から外区に凸出する剣文が加わる。Ⅱ型Ⅱ・Ⅲ式は、Ⅱ型葵文瓦当の最も典型的な遺物で、咸陽時代の前3世紀に盛行した瓦当と見られる。Ⅱ型Ⅱ式には前3世紀、Ⅱ型Ⅲ式には前3世紀中・後葉の年代を仮定した。Ⅱ型Ⅳ式瓦当の内区は輻射文となっている。Ⅱ型Ⅳ式瓦当は阿房宮址からの出土も伝えられ、前3世紀末の遺物であろう。輻射文を併用する図柄は、前3世紀末ごろに盛行したようである。

Ⅲ型は、周縁から外区内側に凸出する葵文を有する文様である。Ⅲ型Ⅰ・Ⅱ式には花卉形葵文が施される。Ⅲ型Ⅰ式は推定櫟陽から出土し、Ⅲ型葵文瓦当の中では古手に属すと思われ、前4世紀の年代を推定した。Ⅲ型Ⅱ式には縄状圏線が施され前3世紀前・中葉を仮定した。Ⅲ型Ⅲ式は、外区、内区の葵文が爪形を呈しているが、葵文の配置はⅢ型Ⅱ式とほぼ同じである。伴出する遺物から秦統一時代の遺物と考え、前3世紀後葉の年代を考えた。Ⅲ型Ⅳ式は、外区に、圏線と、周縁内圏線から出る短い葵文が存在する。内区は輻射文で埋められる。縄状圏線と輻射文の関係から前3世紀末の遺物と判断した。

Ⅳ型はⅠ・Ⅱ・Ⅲ型中に含まれない各種の葵文瓦当である。Ⅳ型Ⅰ式は圏線から外区に特徴のある太い葵文が外出する。咸陽1号宮殿址出土の遺物であるが年代の手掛に欠ける。秦統一時代の前3世紀末に属す可能性が強いと思われる。Ⅳ型Ⅱ式は、Ⅰ型Ⅲ式の伝統を受けた文様と考えられるが、Ⅰ型の特徴である複線葵文ではなく、文様図案も著しく乱れているのでⅣ型に入れた遺物である。年代的には、前3世紀末あたりが妥当なところと思われる。Ⅳ型Ⅲ式は、優美な葵文瓦当であるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型とはまったく別系統の文様である。四葉文の出現時期を従来の年代観よりも溯らせれば、前4世紀の可能性もある遺物であるが、一般的には、前3世紀末の遺物とするのが妥当なところであろう。

Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のいずれの型式の葵文瓦当も、前4世紀に出現している。Ⅰ型とⅢ型は前4世

紀の前半の出現で、Ⅱ型は前4世紀後葉の出現である。そして、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型いずれの型式の葵文瓦当も秦統一時代の前3世紀末まで、それぞれの文様の変遷をとげている。しかし、それぞれの変遷をとげると同時に、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型共通の要素として、文様図案に輻射文や縄状圏線を併用する現象が見られる。

葵文瓦当は、推定櫟陽城が築かれた前4世紀に出現し、推定櫟陽城の造営にあたっては、多くの葵文瓦当が使用されたと考えられる。前4世紀の中葉に咸陽城への遷都が行なわれるが、咸陽遷都後の前3世紀にも、必要に応じて多くの葵文瓦当が利用されている。第二節の「秦の瓦当」で述べたように、前3世紀の中葉には、相当量の雲文瓦当が用いられ、瓦当文の主流は雲文に変わっていった。従って前4・3世紀の秦では、雍城に見られるような鳥獸文瓦当、推定櫟陽城・咸陽城などから出土する葵文瓦当、咸陽城・秦始皇陵から多量に出土する雲文瓦当など、多種の瓦当が目的と必要に応じて併用されていたと考えられる。葵文瓦当は、前3世紀中葉以降、瓦当文の主流が雲文に移った後も秦滅亡の前206年からしばらくの間、秦瓦当としての伝統を保っていたようである。

六 おわりに

本小論では、雍城、推定櫟陽城、咸陽城から出土した葵文瓦当を中心に、収蔵品や著録に見られる葵文瓦当について、秦瓦当中に占める葵文瓦当の位置づけを行ない、秦都城址との関係を述べ、最後に葵文瓦当の編年を行なった。瓦当の編年にあたっては、雍城から櫟陽城、咸陽城への遷都と、咸陽における宮殿の造営を念頭に置いて考察を試みるとともに、「世紀」によって年代を示した。従来の年代観に混乱を起す年代を提示したかもしれない。諸先輩からの御指導、御批判をいただければ幸いである。

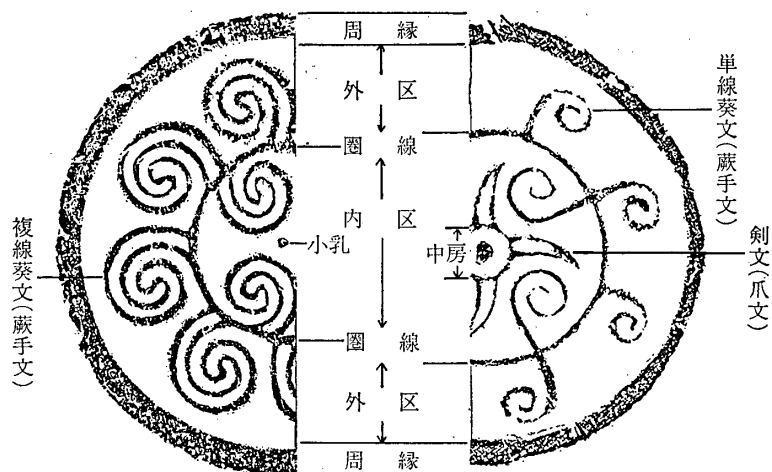
(1983年3月3日脱稿)

注

- 1) 関野貞, 1918
- 2) 関野貞, 1938, 114頁
- 3) 関野貞, 1928, 9頁
- 4) 梅原末治, 1938, 453頁
- 5) 駒井和愛, 1937
- 6) 駒井和愛, 1938
- 7) 駒井和愛, 1940
- 8) 程敦, 1787
- 9) 朱楓, 乾隆年間
- 10) 羅振玉, 1914
- 11) 関野雄, 1952
- 12) 三上次男, 1969
- 13) 陳直, 1963
- 14) 『史記』秦始皇本紀には、「始皇初即位, 穿治鄠山。及并天下, 天下徙送詣七十餘萬人。穿三泉, 下銅而致椁。宮觀百官, 奇器珍怪, 徙臧滿之」さらに、「二世皇帝元年, 二世下詔, 增始皇寢廟犧牲及山川百祀之禮, 令羣臣議尊始皇廟」と見られる。

秦葵文瓦当考

- 15) 陕西省臨潼県文化館, 1974
- 16) 秦都咸陽考古工作站・馬建熙, 1976
- 17) 駒井和愛, 1937
- 18) 張旭, 1982
- 19) 飯島武次, 1982
- 20) 『史記』秦本紀には、「寧公二年, 公徙居平陽……武公元年, 居平陽封宮」とある。
- 21) 陕西省文物管理委員会, 1966
- 22) 陕西省社会科学院考古研究所鳳翔隊, 1963
- 23) 陕西省社会科学院考古研究所鳳翔隊, 1963。徐錫台・孫德潤, 1963
- 24) 陕西省雍城考古隊, 1982
- 25) 陕西省雍城考古隊, 1978
- 26) 鳳翔県文化館・陕西省文管会, 1976
- 27) 朱捷元・黒光, 1964
- 28) 陕西省文物管理委員会, 1966
- 29) 瀧川亀太郎, 1956, 秦本紀第五, 47頁
- 30) 陕西省文物管理委員会, 1966
- 31) 王子今, 1982
- 32) 陕西省社会科学院考古研究所渭水隊, 1962
- 33) 秦都咸陽考古工作站, 1976, 24頁
- 34) 秦都咸陽考古工作站・劉慶柱, 1976, 26頁
- 35) 咸陽市文管会・咸陽市博物館・咸陽地区文管会, 1980
- 36) 秦都咸陽考古工作站, 1976
- 37) 陕西省博物館・文物会調査小組, 1974
- 38) 陕西省社会科学院考古研究所渭水隊, 1962
- 39) 葵文瓦当の名称に関しては下図を参照されたい。



注39図 葵文瓦当の名称

- 40) 陕西省文物管理委員会, 1966
- 41) 関野雄, 1971, 37頁
- 42) 四川省博物館, 1960
- 43) 四川省文物管理委員会, 1956

- 44) 張旭, 1982, 63頁
- 45) 関野貞, 1928, 1938
- 46) 陝西省博物館, 1965, 26
- 47) 張旭, 1982, 63頁
- 48) 陝西省社会科学院考古研究所鳳翔隊, 1963
- 49) 秦都咸陽考古工作站, 1976
- 50) 第6図の7に示した写真は、『文物』1976年第11期, 図版参に載ったものである。第4図の10に拓本を示した瓦当の裏焼写真か。
- 51) 陝西省考古所鳳翔発掘隊, 1962
- 52) 張旭, 1982, 65頁
- 53) 陝西省文物管理委員会, 1966
- 54) 三上次男, 1969
- 55) 陝西省博物館, 1965, 27
- 56) 陝西省博物館・文管会調査小組, 1974
- 57) 劉敦楨, 1980
- 58) 陝西省博物館, 1965, 29
- 59) 張旭, 1982, 64頁
- 60) 陝西省博物館, 1965, 25
- 61) 陝西省考古所鳳翔発掘隊, 1962

図出所目録

- 第1図 (1)(2), 徐錫台・孫徳潤, 1963
- 第2図 陸地測量部「富平県」100,000分之1, 1935
- 第3図 (1)(2)(3)(4)(5), 秦都咸陽考古工作站, 1976, 図18
- 第3図 (6)(7)(8)(9)(10), 陝西省博物館・文管会調査小組, 1974, 図4
- 第3図 (11)(12), 陝西省社会科学院考古研究所渭水隊, 1962, 図12
- 第4図 (1)(2)(3)(4)(5), 陝西省文物管理委員会, 1966, 図15
- 第4図 (6), 筆者蔵拓本
- 第4図 (7), 陝西省博物館, 1965, 26
- 第4図 (8), 張旭, 1982, 図1
- 第4図 (9)(10), 筆者蔵拓本
- 第4図 (11), 張旭, 1982, 図1
- 第5図 (1), 陝西省文物管理委員会, 1966, 図15
- 第5図 (2), 陝西省博物館, 1965, 27
- 第5図 (3), 張旭, 1982, 図3
- 第5図 (4), 張旭, 1982, 図2
- 第5図 (5), 陝西省博物館, 1965, 25
- 第5図 (6), 張旭, 1982, 図4
- 第5図 (7)(8), 陝西省博物館, 1965, 29, 30
- 第6図 (1), 陝西省社会科学院考古研究所渭水隊, 1962, 図版4
- 第6図 (2), 筆者写真
- 第6図 (3), 関野貞, 1928, 9頁
- 第6図 (4), 筆者写真

秦葵文瓦当考

- 第6图 (5), 陕西省社会科学院考古研究所鳳翔隊, 1963, 图6
第6图 (6)(7), 秦都咸陽考古工作站・馬建熙, 1976, 图1, 图版3
第6图 (8), 筆者写真
第6图 (9), 陕西省博物館・文管会勘查小組, 1974, 图2
第6图 (10), 秦都咸陽考古工作站・馬建熙, 1976, 图1
第6图 (11)(12), 陕西省考古所鳳翔發掘隊, 1962, 图1
第7图 (1), 筆者图
第7图 (2), 劉敦楨, 1980, 图44
注39图 筆者图

引用文献目録

- 飯島武次, 1982, 「秦都雍城瓦当考」(『駒沢史学』第29号)。
梅原末治, 1938, 「東亜の古瓦に就いて」(『支那考古学論叢』)。
王子今, 1982, 「秦獻公都櫟陽說質疑」(『考古與文物』1982年第5期)。
咸陽市文管会・咸陽市博物館・咸陽地区文管会, 1980, 「秦都咸陽第三号宮殿建築遺址發掘簡報」(『考古與文物』1980年第2期)。
駒井和愛, 1937, 「漢蕨手文瓦当考」(『東洋史会紀要』第2冊, 『中国考古学論叢』所収, 1974年)。
駒井和愛, 1938, 「漢華文瓦当考」(『史苑』第11卷第3・4号, 『中国考古学論叢』所収, 1974年)。
駒井和愛, 1940, 「河北省易県発見の雙龍文瓦当に就いて」(『人類学雑誌』第55卷第1号, 『中国考古学論叢』所収, 1974年)。
四川省博物館, 1960, 『四川船棺葬發掘報告』(北京)。
四川省文物管理委員会, 1956, 「成都羊子山第172号墓發掘報告」(『考古学報』1956年第1期)。
朱捷元・黒光, 1964, 「興平県念流寨和臨潼県武家屯出土の古代金餅」(『文物』1964年第7期)。
朱楓, 乾隆年間, 『秦漢瓦当图記』
徐錫台・孫德潤, 1963, 「鳳翔県発現“年宮”与“棧”字的瓦当」(『文物』1963年第5期)。
秦都咸陽考古工作站, 1976, 「秦都咸陽第1号宮殿建築遺址簡報」(『文物』1976年第11期)。
秦都咸陽考古工作站・馬建熙, 1976, 「秦都咸陽瓦当」(『文物』1976年第11期)。
秦都咸陽考古工作站・劉慶柱「秦都咸陽幾個問題的初探」(『文物』1976年第11期)。
関野雄, 1952, 『半瓦当の研究』(東京)。
関野雄, 1971, 「金餅考——戦国・秦漢の金貨に関する一考察——」(『東洋文化研究所紀要』第53冊)。
関野貞, 1918, 「西遊雑信, 第一, 支那に於ける最古の瓦当」(『建築雑誌』第32輯第384号)。
関野貞, 1928, 「瓦」(『考古学講座』第5号)。
関野貞, 1938, 「支那の瓦及び埴」(『支那の建築と芸術』東京)。
陕西省考古所鳳翔發掘隊, 1962, 「陝西鳳翔南古城村遺址試掘記」(『考古』1962年第9期)。
陕西省社会科学院考古研究所渭水隊, 1962, 「秦都咸陽故城遺址的調查和試掘」(『考古』1962年第6期)。
陕西省社会科学院考古研究所鳳翔隊, 1963, 「秦都雍城遺址勘查」(『考古』1963年第8期)。
陕西省博物館, 1965, 『秦漢瓦当』(北京)。
陕西省博物館・文管会勘查小組, 1974, 「秦都咸陽故城遺址發見的窯址和銅器」(『考古』1974年第1期)。
陕西省文物管理委員会, 1966, 「秦都櫟陽遺址初步勘探記」(『文物』1966年第1期)。
陕西省雍城考古隊, 1978, 「陝西鳳翔春秋秦國凌陰遺址發掘簡報」(『文物』1978年第3期)。
陕西省雍城考古隊, 1982, 「鳳翔馬家莊春秋秦一号建築遺址第一次發掘簡報」(『考古與文物』1982年第5期)。
陕西省臨潼県文化館, 1974, 「秦始皇陵出土的瓦当」(『文物』1974年第12期)。
瀧川亀太郎, 1956, 『史記会註考證』(東京)。

飯島武次

張旭, 1982, 「秦瓦当芸術」(『考古與文物』1982年第2期)。

陳直, 1963, 「秦漢瓦当概述」(『文物』1963年第11期)。

程敦, 1787, 『秦漢瓦當文字』

鳳翔県文化館・陝西省文管会, 1976, 「鳳翔先秦宮殿試掘及其銅質建築構件」(『考古』1976年第2期)。

三上次男, 1969, 「戦国瓦當と秦瓦當——瓦當文様を通じて見た戦国文化と秦帝国文化との関係——」(『中国古代史研究』第3, 東京)。

羅振玉, 1914, 『秦漢瓦當文字』

劉敦楨, 1980, 『中国古代建築史』(北京)。

追記 1983年3月17日, 北京にて, 王丕忠, 1982, 「漢長陵付近出土の秦漢瓦当」(『文物資料叢刊』6, 北京)を入手した。この報告中には, II型3式, III型2式, III型4式の葵文瓦当各1点の拓本が掲載されていた。II型3式, III型2式は秦瓦当として, III型4式は漢瓦当として取扱われているが, 筆者は, 本論文に述べたごとく, III型4式を, やはり前3世紀末の葵文瓦当と考えたい。(1983年6月30日記)